

解説パネル文章①

藤原道長による金峯山参詣

藤原道長（966～1028）は、積極的に天皇と姻戚関係を結ぶことで権力を盤石なものにしましたが、そのような中で、一条天皇の中宮となった娘の彰子（988～1074）には特に並々ならぬ思いを込めていたと考えられます。それを示すものが、寛弘4年（1007）に行われた金峯山参詣（きんぷせんさんけい、御嶽詣〔みたけもうで〕とも）でした。

金峯山（奈良県吉野郡吉野町）は、修験（しゅげん）の始祖、役行者（えんのぎょうじゃ）が開いたとされる霊地です。延喜5年（905）の宇多上皇の参詣をはじめ、平安貴族にとって金峯山参詣は重要な行事だったのです。

それは道長にとっても同じであり、長徳4年（998）、33歳の折に金峯山参詣を計画しました。しかし、当時伝染病が流行していたため、やむを得ず中止しています。この時に奉納するため書写していた経典が、「法華経残闕」（No.4・5）です。実際に道長が金峯山に参詣できたのは、それから9年後の寛弘4年（1007）のことでした。

道長の日記である『御堂関白記』によれば、寛弘4年閏5月17日から精進潔斎（しょうじんけっさい、肉食をやめ読経や写経などをして身を清めること）を行い、8月2日未明に出発したとされます。京の都を出た道長一行は、石清水八幡宮から、興福寺、大安寺を経て吉野に入り、8月10日に金峯山上に到着しました。

そして翌11日、山上にあるいくつもの堂舎に様々な品物を奉納しています。そのクライマックスとして、書写した経典を納めた金銅製の経筒を本堂の前に埋納し、その上に金銅の燈籠（とうろう）を建て、火を灯し供養しました。

経筒の側面に刻まれた願文からは、道長の切実な仏教信仰が見て取れます。それに加えて、道長にとっても1つの大事な願いが、一条天皇の中宮となった娘の彰子が皇子を産むことだったと考えられます。

藤氏長者として一門を率いる道長にとって、自身の孫となる皇子（次の天皇）の誕生は悲願でした。それは、摂関家の権力や権威が、天皇の外戚（がいせき）となってはじめて成り立つからです。この参詣は道長にとって大成功で、翌年には実際に彰子が懐妊し、敦成親王（あつなりしんのう、後一条天皇）が生まれています。『栄花物語』「はつはな」では、彰子の懐妊がわかった際に道長は「みたけのしるし」と喜び、皇子誕生を祈願しての金峯山参詣だったと記しています。

この後、金峯山を中心として全国各地で経塚が造られるようになりますが、その根本には、道長個人への追慕に加えて、摂関家の繁栄に追随しようとする思いもあったのかもしれませんが。そういった意味において、道長による経筒と経典は、日本の歴史の中においても記念碑的な遺品といえるでしょう。

解説パネル文章②

藤原彰子による如法経埋納

紫式部が『源氏物語』を書くきっかけとなった藤原彰子（988～1074）は、12歳で一条天皇に入内して中宮となりました。そして、後一条天皇、後朱雀天皇を産み、後冷泉天皇と後三条天皇の祖母にもなりました。さらに、亡くなる前年には、曾孫の白河天皇が即位しています。87歳という驚くほどの長寿で、国母（こくも）として5人の天皇を見届けた彰子は、天皇家にとっても摂関家にとっても、極めて重要な存在でした。

そんな彰子も、父である道長と同様に仏教を篤く信仰していたことが知られます。彰子は、道長が創建した法成寺に設立された尼戒壇で、女性として日本で初めて受戒しています。「宝相華文経箱」(No.3)は、その彰子が自ら書写した『法華経』を比叡山延暦寺の横川に奉納する際に納めた経箱です。

彰子が経典を奉納するきっかけになったのは、万寿4年（1027）の道長の死だったと考えられます。藤原氏の栄華を体現した道長の死が大きな影響を与えたことは容易に想像でき、道長亡き後の彰子にとって、権力の継承が最大の課題であったといえるでしょう。

しかし、この時、彰子の子である後一条天皇の中宮となった彰子の妹・威子（1000～1036）にはまだ皇子が生まれておらず、道長の血を引くのは、同じく彰子の子・敦良親王（後朱雀天皇）と彰子の妹・嬉子（1007～1025）の間に生まれた親仁親王（後冷泉天皇）のみでした。

そのような状況で、長元4年（1031）、彰子は石清水八幡宮、四天王寺、住吉大社へ参詣しています。9月25日から10月3日にかけて行われたもので、彰子の生涯においてただ一度だけ行われ、かつ大規模な参詣でした。そして同月末には、横川への如法経の奉納が計画されていたことから、この参詣と如法経の奉納は一体のものと考えられます。

その際、彰子が規範としたのは道長による金峯山参詣だったのでしょうか。それに加えて、道長の姉で円融天皇に入内した詮子（東三条院）が、長保2年（1000）に彰子と同じ道程で参詣をしている点も注目されます。詮子は、一条天皇を産んで国母となり、道長と彰子に対して様々な便宜を図っていたことが知られます。女人禁制のため金峯山参詣ができない彰子は、詮子の参詣をもとにしながら道長の参詣を再現しようとしたと考えられます。そして、慈覺大師円仁（794～864）が開いた横川とは、道長の祖父・師輔や父・兼家らが復興に寄与するなど、代々強いつながりがありました。そのため、如法経を埋納する先に、一族とゆかりのある横川の地が選ばれたと考えられます。

つまり、彰子は詮子や道長の参詣をモデルとしつつ、皇子誕生と権力の継承という切実な願いを込めて、道長一族にゆかりが深い横川の地に、自ら書写した『法華経』を納めたといえます。

解説パネル文章③

比叡山山内の経塚

平安時代以降、各地で経典の埋納がおこなわれました。経典を筒形や箱形の容器に納めて、土中の穴や小石室に埋めるというものです。経典を直接納める容器を経筒(きょうづつ)や経箱(きょうばこ)といい、埋納した場所を経塚(きょうづか)といいます。比叡山横川の地では、経塚群が確認されており、経筒やこれを保護する陶製などの外容器、ともに納められた合子(ごうす)、銭貨などの副納品が出土しています。

彰子の経箱は、現在の根本如法塔(こんぽんによほうとう)付近で大正12年(1923)に発見されました。如法塔を建立するため地ならしをおこなった際、経塚にともなう遺物がまとまって出土したのです。平安時代の精緻な金工品である経箱は、花崗岩製の台石の上に置かれた高さ164cmの銅筒に納められて、土中にありました。箱の中身は朽ちていたものの、巻物の軸頭や軸木、墨書のある紙片などが残っていたと報告され、箱の中に経典を納めた痕跡も確認されています。

この周囲からは、他に青銅製経筒3口、瓦製の外容器に納められた金銅製経筒1口なども出土しており、経塚群があったことがわかります。残念ながら、これらの遺物のほとんどは昭和17年(1942)に、横川中堂が落雷による火災にあった際に失われてしまいました。経箱の外容器であった大型の銅筒も焼失しており、当時、京都国立博物館に出陳中であった経箱のみが今に伝わっています。

横川根本如法塔の周辺からは、その後も、偶然の発見や小規模な調査で、経塚に関連する遺物が見つかっています。

如法塔から東南に20m程離れた地点では、1963年に棺とみられる大甕(おおがめ)が確認されましたが、この周囲からは、古銭や合子(ごうす)、刀装具(とうそうぐ)、念珠玉類など、経典を納める際の副納品ともいえる品々が出土しています。

また、如法塔の北西側裏山で、1965年の台風による倒木周辺から採集された資料として、青銅製経筒1点、鉄地金銅製経筒1点のほか、陶製、瓦製、須恵質、土師質などの経筒の外容器が複数出土しています。また、般若心経を鏡面に彫った方鏡(ほうきょう)も見つかっています。

さらに、横川の諸堂から南に離れた山中(霊山遺跡)で1976年に発掘調査がおこなわれたところ、広い範囲で中世墓地群が確認されました。多数の蔵骨器(ぞうこつき)が出土した墓地内では、石組の中に青銅製の経筒を納めた経塚も1基見つかっています。

この他、延暦寺境内では、建造物や施設修繕にともない、遺物や遺構が少しずつ確認されています。特に横川の地は、様々な出土品から平安時代以降に多数の経塚が造営されたことが知られ、聖地比叡山で経塚に託された祈りのようすを想像することができる場所です。

解説パネル文章④

紫式部墮地獄説話と源氏供養

紫式部が書いた『源氏物語』が後世に大きな影響を与えたことは言うまでもありませんが、それを批判した考えも起こります。それがよくわかる代表例が「源氏供養」です。

平安時代の終わり頃に平康頼（たいらのやすより）が編んだとされる『宝物集』という説話集には、紫式部は空想の物語を書いたことで地獄に墮ちて苦しみを受けていると、ある人が夢に見たというので、歌人らが集まって終日経典を写して紫式部を弔った、という話がみられます。

また、13世紀中期以降に藤原信実（ふじわらのぶざね）が編んだとされる『今物語』には、ある人の夢に影のようなものが現れ、誰かと尋ねるとそれは紫式部であると答えたという話が記されます。「空想の物語を書いて人の心を惑わしたことにより地獄に墮ちて苦しみを受けることが耐え難い。『源氏物語』の巻名を入れた南無阿弥陀仏という歌を巻ごとに人々に読ませて私の苦しみを弔ってください」と言ったので、具体的にはどうしたらよいか尋ねたところ「きりつぼにまよはんやみもはるばかりなもあみだ仏とつねにいはなん」と詠んだといひます。

以上のような話は「紫式部墮地獄説話」として知られ、平安時代の終わり頃から起こる戒律復興運動と連動して生まれたものと考えられます。そもそも仏教では、僧以外にも在家の信者が守るべき「戒律（五戒）」が次のように定められていました。

不殺生戒（ふせっしょうかい）	生き物を故意に殺してはならない
不偷盗戒（ふちゅうとうかい）	他人のものを盗んではならない
不邪淫戒（ふじゃいんかい）	不道德な性行為を行ってはならない
不妄語戒（ふもうごかい）	嘘をついてはいけない
不飲酒戒（ふいんしゅかい）	酒を飲んではならない

仏教側からすれば『源氏物語』とは空想の物語であり、「不妄語戒」を破っているために地獄に墮ちたと考えられていたのです。この考え方は広く知られ、作者である紫式部だけではなく、それを読む人も罪人とされていました。そこで、地獄に墮ちた紫式部を供養し、同時に読む人も救済される法要、「源氏供養」が行われるようになりました。

平安時代末には実際に源氏供養が行われていたとされ、そのために作られたのが天台僧の澄憲（ちようけん、1126～1203）による「源氏一品経表白」です。表白とは法要の際に読まれるもので、その中には供養の具体的な内容が記されています。それによれば、『源氏物語』の作者である紫式部と読者とを救済するため、『法華経』28品を書写し、それぞれの巻の見返しに源氏絵を描き、さらに『法華経』各品にそれぞれ『源氏物語』の巻名をあてたとされます。

また、澄憲の子の聖覚（しょうかく、1167～1235）によるとされる「源氏供養表白」もあり、石山寺に古い写本が伝わっています（No.16）。この聖覚によるものは、後に能の演目「源氏供養」のもととなりました。

その内容は、次のようなものです。安居院法印（聖覚）が石山寺を訪ねると紫式部の霊が現れ、『源氏物語』の供養を怠ったために今も苦しんでいると明かして聖覚に供養を頼み、姿を消しました。夜、聖覚

が供養をしていると、紫式部の霊が再び現れ、供養に感謝して舞を舞い、救われたことを明かして、消えていくというものです。

そして、紫式部が舞を舞う際にこの表白文が読み上げられるのです。聖覚による「源氏供養表白」は、「桐壺の……」と始まり、「桐壺」から「夢浮橋」までの巻名が順に詠み込まれています。そして最後には阿弥陀如来による紫式部の救済と、『源氏物語』を読む人の弥勒菩薩の浄土への往生を祈願しています。

巻名を表白文に取り入れて供養する形は、巻名歌（巻名を歌に詠み込んだもの）の成立とも関わってくるものといえます。室町時代の公家で『源氏物語』研究の第一人者であった三条西実隆（1455～1537）は自ら詠んだ巻名歌を石山寺に奉納しており、それはこの「源氏供養表白」がもとになったと考えられます。その後、実隆の後を追うように多くの文人や歌人がそれぞれ巻名歌を詠み石山寺に奉納していますが、それもやはり源氏供養のために作られたものだったのでしょう。

このように、『源氏物語』は文学という枠組みから飛び出し、多くの分野に大きな影響を与え、新たな文化を作り上げました。この影響力の大きさからも、『源氏物語』がいかに人々に愛されていたかが知られます。

解説パネル文章⑤

紫式部と定暹

『源氏物語』に登場する「横川の僧都」が比叡山延暦寺横川の僧であった恵心僧都源信（えしんそうずげんしん）だとする説は広く知られていますが、紫式部の身近なところに僧がいることはあまり知られていません。

それが紫式部の異母兄弟とされる定暹（じょうせん、生没年不詳）と、おじの康延（こうえん、生没年不詳）です。定暹と康延は、ともに園城寺（三井寺）の僧であり、「伝法灌頂血脈譜」（園城寺で阿闍梨になった人の名簿）には、2人の名前が記されています。つまり、紫式部の一族は園城寺とゆかりが深いことが知られます。その関係で、父の藤原為時も長和5年（1016）に園城寺で出家したと考えられます。

ここでは特に、異母兄弟の定暹についてみていきます。これまで定暹については、「伝法灌頂血脈譜」に「越前守為時子」と記されているほか、長保4年（1002）に行われた藤原詮子（東三条院、962～1002）追善の法華八講に出仕し、寛弘8年（1011）に行われた一条天皇の御大葬にも出仕していることが知られています。

この度、大阪大谷大学の宇都宮啓吾先生よりご教授いただき、定暹についての新しい資料が見つかったので紹介します。それは、大東急記念文庫に所蔵される「金剛界儀軌」（永延元年〔987〕書写）で、定暹が「観音院十禅師」と名乗っていることがわかります。

ここにある「十禅師」とは、内供奉十禅師のことであり、定暹は天皇のために祈祷するトップエリートであったことが知られます。さらに、「観音院」とありますが、これはかつて洛北・岩倉の大雲寺にあった観音院であり、この大雲寺は紫式部の曾祖父にあたる藤原文範（909～996）によって建てられた寺院です。

正暦4年（993）に天台宗が円仁派（山門）と円珍派（寺門）に分派した際、円珍派はこの大雲寺に下りてきており、一時、円珍派の拠点ともなりました。その後、円珍派は園城寺へと移り、本寺としました。

つまり、園城寺にとって大雲寺はそれだけ重要な寺であり、そこを開いた文範の一族である紫式部や定暹らと園城寺の繋がりが深いのは明らかです。

さて、先行研究によれば、『源氏物語』の「蓬生」に登場する「禅師の君」という僧が定暹のことではないかと指摘されています。「禅師の君」が登場する場面はこのみであり、また、定暹に関する資料が乏しかったためあまり顧みられることはありませんでした。しかし、今回見つかった資料に定暹が内供奉十禅師であったことが記されており、「禅師の君」のモデルという信憑性も高まるものと思われま

そう考えると、『源氏物語』の「若紫」において、光源氏が病に悩んでいた際、「北山になむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる（北山の何々寺という所に、優れた修行者がいます）」と人に言われて向かった先で、後に最愛の女性となる紫の上と出会うという描写があるのですが、この「なにがし寺」というのも、大雲寺のことを指しているのかもしれない。

解説パネル文章⑥

「横川の僧都」と恵心僧都源信

『源氏物語』に登場する僧で最も有名なのは、「横川の僧都」と呼ばれる僧でしょう。主に 物語最後の「宇治十帖」に登場する人物で、浮舟を助ける場面がよく知られています。

この「横川の僧都」のモデルと考えられているのが、恵心僧都源信(えしんそうずげんしん、942～1017)です。源信は、比叡山延暦寺の横川の僧で、『往生要集』(おうじょうようしゅう)を著して、良忍(りょうにん、1073頃～1132、融通念仏宗の開祖)、法然(ほうねん、1133～1212、浄土宗の開祖)、親鸞(しんらん、1173～1263、浄土真宗の開祖)らに大きな影響を与え、その後の浄土教の発展に大きく寄与しました。

道長も源信と浄土教を信仰しており、寛弘元年(1004)には病氣平癒の祈祷をするよう源信に使者を遣わしているほか、藤原行成(ふじわらゆきなり、972～1028)に『往生要集』の書写を命じ、さらに源信の教えに基づいた無量寿院(のちの法成寺)も建立しています。そして、息子の頼通(よりみち、992～1074)による宇治・平等院の建立とあわせて、末法思想に基づく浄土信仰隆盛の基礎となりました。

その源信ですが、藤原為時を介して紫式部と関わりがあったことが想定されます。長徳2年(996)、為時は、娘の紫式部と共に、国司として越前国へ赴いています。着任した為時は、宋から来日した商船の対応にあたりました。その際に、朱仁聡(しゅじんそう)という人物と詩の贈答をしたことが記録に残されています。実は、源信と朱仁聡は既知の仲でした。

朱仁聡は、永延元年(987)にも来日しており、源信の伝記である『延暦寺首楞嚴院源信僧都伝』によれば、源信は朱仁聡の船で来日した斉隠(さいいん、杭州銭塘西湖水心寺の僧)に出会い、斉隠が帰国する際には『往生要集』を贈っています。

そして、『続本朝往生伝』や『元亨釈書』には、源信が朱仁聡に会うために弟子たちを引き連れて越前国敦賀津に行ったことが記されており、その時に、国司として対応していた為時と源信が出会ったと考えられます。ただ、源信が敦賀へ向かった時期は記されておらず、また、紫式部も1年余で京へ戻っていることから、源信と紫式部が直接会ったかどうかは定かではありません。それ以上の詳細は不明ですが、このような経緯から、紫式部は父の為時を介して源信という存在を認識していたのではないかと思われるます。

また、紫式部が仕えていた藤原道長と彰子の一族は代々横川との関係が強く、道長が金峯山参詣を行った際に同行したのは横川の僧である覚運(953～1007)であり、彰子が横川に如法経を奉納した際には、やはり横川の覚超(960～1034)が関わっています。このような横川との繋がり、道長の祖父である藤原師輔(909～960)と慈恵大師良源(912～985)による横川復興に始まり、それは道長や彰子らも引き継いでいました。

以上のことから、「横川の僧都」は源信をモデルとした可能性が高いと思われませんが、源信ただ1人ではなく、「横川の僧都」とは当時の横川僧全体のイメージが反映されていると考えられます。

解説パネル文章⑦

道長・頼通親子が夢見た世界

撰関家の栄華を体現した藤原道長の仏教信仰の到達点ともいえるのが、法成寺（現在の京都御所と鴨川の間）の創建です。寛仁4年（1020）、病に悩む道長は自邸で出家し、東隣に無量寿院を建立しました。堂内に丈六（4.8m）の阿弥陀如来坐像9体と観音・勢至菩薩が安置される大規模な造営で、このような「九体阿弥陀堂」は道長によって創始されました。その後、次々と堂宇が増築されていき、治安2年（1022）に寺号を「法成寺」と改めました。法成寺は、池を取り囲むように諸堂が配置されており、極楽浄土の様子を描いた浄土曼荼羅の風景を再現しています（浄土庭園）。

このように、道長がはじめた諸堂と庭園を融和させて極楽浄土の世界を再現する試みは、息子の藤原頼通（ふじわらよりみち、992～1074）によって華開きました。宇治・平等院の建立です。

平等院が建立された永承7年（1052）は、「末法」の時代に入ると考えられていました。末法とは、仏教の始祖である釈迦の教えが廃れて世の中が乱れる時代をいいます。末法の世界では悟りを得ることはできないとされ、人々は阿弥陀如来という仏の導きによって極楽浄土に往生しようと願うようになりました（浄土信仰）。このような考え方のもと、源信は『往生要集』を著して極楽の華やかさや地獄の恐ろしさを説き、浄土信仰を広めました。道長は浄土信仰に強く傾倒し、末法の到来に備えて無量寿院を建立し、極楽浄土への往生を祈願しました。子の頼通は、父である道長の思想を引き継ぎながら、極楽浄土の再現をより先鋭化した形で成そうとしたのです。そして翌年の天喜元年（1053）、平等院阿弥陀堂（現在の鳳凰堂）が建てられました。

法成寺のように堂の前に池を配した浄土庭園となっていますが、本尊は1体の阿弥陀如来のみで脇侍も置かず、堂自体は本尊に対して小さく、堂内で礼拝することを想定されていないとされます。その代わりとして、池を挟んだ反対側には「小御所」と呼ばれる礼拝所があり、そこから堂内の本尊を礼拝する仕組みとなっていました。つまり、鳳凰堂自体は堂内で法要や礼拝をするものではなく、平等院という寺院空間全体で浄土曼荼羅の場面を再現する舞台装置となっているのです。その点で、平等院は道長よりもより先鋭化された頼通の浄土信仰をもとに建立された寺院といえます。

その鳳凰堂の本尊が、日本彫刻史上最も著名な仏像の1つとして知られる木造阿弥陀如来坐像（国宝）です。作者は定朝（じょうちょう）といい、その父である康尚（こうしょう）と共に活躍した仏師で、道長の法成寺での造像にも深く関わっていました。定朝の造る仏像は「尊容満月の如し」（『春記』）といわれ、定朝の仏像様式は院政期を中心に大流行しました。

この道長・頼通親子の作り上げた新しい仏堂・仏像様式は、後に多大な影響を与えました。撰関政治における道長一族はよく知られますが、それと同様に、文化的な面においても非常に大きな功績を残しているのです。

解説パネル文章⑧

『法華経』が結ぶ藤原道長と平清盛

『源氏物語』の中では、『法華経』を供養する「法華八講」を行う場面が書かれます。法華八講とは『法華経』（全8巻）を8回に分けて講義するもので、堂内は華々しく飾られ、使用される経典も贅を尽くした大変豪華なものでした。

地獄に堕ちた紫式部を供養するために行われた「源氏供養」でも、『法華経』が供養されたことが知られます。澄憲（ちょうけん、1126～1203）による「源氏一品経表白」によれば、『源氏物語』の作者である紫式部とその読者とを救済するため、『法華経』28品を書写し、それぞれの巻の見返しに源氏絵を描き、さらに『法華経』各品にそれぞれ『源氏物語』の巻名を宛て、供養するとされます。

その特徴は、『法華経』を「一品経」という、各品（章）を1巻ずつ書写している点です（通常は全8巻）。これについては、法華二十八講（全28品を28回にわけて論議を行う）や法華三十講（28品に開経の『無量義経』と結経の『観普賢経』を加えて30回行う）の影響によるものと考えられます。

注目すべきは、法華二十八講を貴族で初めて行ったのが道長の姉の詮子（東三条院）であり、法華三十講を初めて行ったのが道長であるという点です。特に道長の法華三十講については、長保4年（1002）に初めて行われてから道長が亡くなるまで毎年行われた恒例行事でもありました。早く『栄花物語』には、三条天皇の皇后となった道長の娘の妍子（けんし）による一品経書写の記述がみられます。一品経の古い記録として知られ、これ以降一品経が流行する背景には、道長一族の影響が想定されます。

そして、一品経の中でも特に著名なものが、平清盛（1118～1181）一門によって広島・厳島神社に奉納された「平家納経」（国宝）です。

一品経の傑作として知られる本経ですが、源氏一品経供養との関連を指摘する説があります。それは、「源氏一品経表白」にそれぞれの巻の見返しに源氏絵を描いたと記されていることから、「平家納経」の見返しに描かれる絵を源氏絵と解釈し、「源氏供養」の部分的先行例としたものです。

「源氏供養」の影響かは別として、一品経供養という観点からみた時に、清盛の念頭には道長の存在があったのではないかと想像されます。というのも、厳島への奉納に先立ち、清盛は、道長の子孫である藤原（近衛）基実（1143～1166）に娘の盛子（1156～1179）を嫁がせています。この後、基実は急逝してしまいますが、その時にやはり一品経供養が行われたことが知られます。『兵範記』仁安元年（1166）9月3日、6日頃によれば、亡くなった基実のために、彼を後見していた藤原邦綱（1121～1187）の主導のもと、願文を藤原伊行（1139頃～1175頃）が書いて一品経供養が行われました。実はこの法要を主導した邦綱は紫式部の父藤原為時の子孫、伊行は道長の側近であった藤原行成の子孫であり、基実を含め3人も道長ゆかりの人物でした。さらに、邦綱は清盛と親しく、清盛に養子（清邦）を出している他、娘の綱子は清盛の娘の徳子（建礼門院）の乳母を務めています。そして伊行の娘は徳子に右京太夫として出仕しており、この3人と清盛は非常に密接な繋がりがありました。

以上のように、清盛と道長周辺の後裔とは密接な繋がりがみられ、清盛が厳島神社に一品経を奉納した背景には、道長による金峯山参詣や法華三十講などを念頭に、摂関家の権威を踏襲しようとする意図があったのではないかと想定されるのです。